

技術者からの視点

●第44回● 一次資料

藍野大学非常勤講師 木下 親郎

雑談をしていてわからないことが出てくると、スマートフォンをとり出し、インターネットから即座に情報を得るのが普通になった。店頭で、片手に商品を持ち片手でスマートフォンを操作して、インターネットの関連情報を調べているのもよく見かける。宿や料理店も、インターネットに情報を載せないことを選択肢から漏れてしまう時代になった。

簡単に得られる情報の信頼度

書店には、ハウツーものや、話題の事件の解説書が氾濫している。これらからの情報は簡単に手に入れることができ、簡潔で説得力があるので、信憑性や出所について疑念を持つことなく、信じたくなる。

雑談では、情報の正確さよりも、会話が弾むことが求められるだろうし、宿の設備や食事の内容が異なっている、あきらめればすむことである。

また、入門書でかたよった知識を持ったとしても、それを契機として専門書に読み進めば、幅広い知見を得ることができるだろう。

しかしながら、手軽に得た情報をそのまま社会通念と思いついてしまおうと問題になる。個人個人が、メディアの伝える情報を適格に判断できる能力（メディア・リテラシー）を磨くことが望ましいが、情報の発信側も節度を守ってほしい。とくに、ジャーナリストや

評論家、教えることを職業とする教師は、自らが信ずる情報を伝えるべきである。

獨創性における一次資料の重み

情報の多くには、もともとなる「資料」がある。広辞苑は「資料」を「もともとなる材料」とくに、研究・判断などの基礎とする材料」と説明している。

「資料」を仕分けすると、原典、あるいは生の資料である「一次資料（プライマリー・ソース）」、一次資料を引用あるいは加工した「二次資料（セコンダリー・ソース）」、「三次資料（ターシャリー・ソース）」などになる。

既存の「資料」を参考にしてつくられた小説は、作者の創作なので「二次資料」である。「一次資料」を論評した評論も「一次資料」である。しかし、翻訳書や「二次資料」を使って原典を論じた評論は、引用した「資料」と原典とのあいだに差があることもあり、必ずしも「一次資料」とはいえないことがある。

注意しなければならないのは、歴史上の人物を主人公とした小説やテレビドラマだ。歴史小説は、歴史学者が書く歴史書と異なり、作者や脚本家、演出家がつくった「一次資料」（創作）であるが、感動的に演じられるテレビドラマや、巧みな筆致で書かれた小説は、登場する人物や光景を実像と信じ込みたくなく、また信じ込んでしまうことが多い。

技術者の使命は信頼性のある製品をつくることであり、検証された設計手法を用いるのが鉄則であるが、最近では、インターネットで手に入れた「資料」を使おうとする技術者が現れるようになったと聞く。技術部門の管理者は、「資料」の出所まで気にしなければならぬ。

一方では、他者から依頼を受けて、高度な計算を行う専門のソフトウェア会社が増えている。また、必要条件を入力すれば、複雑な機械や部品の設計を自動に行い、場合によっては製品を完成させてしまうほどに、コンピュータ技術は進化している。これらのコンピュータによる作業はブラックボックスであるが、完成度が高いので、入力条件を間違わない限り心配はいらないようだ。

しかし、ブラックボックスに依存する限り、差別化は難しい。世界一のものを目指すには、自製のブラックボックス、つまり「一次資料」によらねばならない。

速報性か正確性か

昨今のマスメディアの報道には、納得できずに「一次資料」を確認したいと思うものがある。たとえば、政府高官の外国での発言についての報道が、外国メディアの報道と異なる印象を与えることがあり、インターネット上の関連省庁のホームページに記載された公

式発表の全文を読んで、ようやく状況を理解するということがある。

そもそもテレビは、速報と映像により視聴者に強い印象を与えるが、カメラの視野は狭く、時間も数秒あるいは数十秒の放映なので、全体像を伝えるのは難しい。

かつては、テレビとラジオが即座に実況を報道し、一流紙（クオリティーパー）が、翌朝全体像を示すという役割分担があったように思う。最近では、インターネットが、テレビに遅れることなく、しかもテレビで報道できなかつた詳細を伝えることができるので、クオリティーパーも、インターネット版に力を入れている。

しかし、すべてを俯瞰して、好みの記事を選択できるという新聞の威力は、パソコンやタブレット端末、スマートフォンには無理だ。新聞は、時間をかけて「一次資料」を徹底的に分析して、正確で良質の記事を提供すれば、速報性での不利をかえって利点に変えることができる。最近では活字が大きくなったが、そのために記事の中身が薄くなることは避けてほしい。

「一次資料」へのこだわりが名著を生んだ

歴史書では「資料」が基本である。英国人のエドワード・ギボンは、1776年から1788年にかけて「ローマ帝国衰亡史」を出

版した。彼は得られる限りの「一次資料」を求めて、フランス革命の時期に英国とスイスのあいだを移動している。3000ページを超す大著で、本文以外にも多くの資料が引用されている。

歴史学者アルバート・ホーラーニは「アラブの人々の歴史」(1991年出版)のなかで、「中世のアラビア人は、多くのギリシャ語歴史資料をアラビア語に翻訳した。18世紀にはこれらのアラビア語で書かれたギリシャ歴史書が、ヨーロッパの言語に翻訳された。ギボンは、新しく紹介されたギリシャ歴史書の多くを読んでいた」と書いている。

「ローマ帝国衰亡史」は、「一次資料」へのこだわりによって、いまだにローマ史研究の必読書となっているようだ。現代の歴史書にもギボンの文章は必ず引用されている。さらには英文学の分野でも、18世紀を代表する作品として、高い評価が与えられている。

